

令和 5 年 5 月 7 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20038

研究課題名（和文）文明形成期におけるアンデス・アマゾン間の相互交流：ワヤガ・ウカヤリ川流域の事例

研究課題名（英文）Interaction between the Andes and the Amazon during the Formative Period: The Case of the Huallaga-Ucayali River Basin

研究代表者

金崎 由布子 (Kanezaki, Yuko)

東京大学・総合研究博物館・助教

研究者番号：10908297

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アンデス・アマゾン間の相互交流が、文明形成にどのように作用したかを明らかにするために考古学調査を実施した。初年度に行った踏査では、先行調査において集中的な遺跡分布が確認されている中標高地帯だけでなく、形成期の遺跡が見つかっていなかったワヌコ北西部の高標高地域や、標高1000mを下回る熱帯雲霧林地域においても遺跡が発見された。そこで次年度には、アンデス・アマゾン間の相互交流を理解する上で特に重要と考えられる、ワヤガ川支流モンソン川流域の熱帯雲霧林地域に位置するチャウピヤク遺跡の発掘調査を実施した。その結果、前一千年紀におけるアンデス・アマゾン間の交流実態の一端が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、1970年代以降調査が停滞していたアンデス東斜面や熱帯低地における新たな考古学研究の先鞭をつけたことである。アンデス文明の形成には、隣接するアマゾン低地との関係が重要であるとされてきたが、調査の少なさによりその実態は明らかにされてこなかった。本研究では、これまで殆ど考古学調査が入っていなかった地域での踏査・発掘の実施により、アンデス・アマゾン間関係を考える上で極めて重要なデータを得ることができた。また、地元住民と協力して調査を実施することで、地域の歴史への関心を促し、文化財保護の意識を高めることにつながった。

研究成果の概要（英文）：In this study, an archaeological survey was conducted to examine how the interactions between the Andean and Amazonian regions contributed to the formation of civilization. During the first year, archaeological sites were discovered not only in the middle-elevation areas, which have been intensively studied, but also in the high-elevation areas northwest of Huanuco, where no Formative Period sites had been found, as well as in the tropical cloud forest areas below 1000 meters.

In the subsequent fiscal year, we conducted an excavation survey of the Chaupiyacu site, located in the tropical cloud forest area in the Monzon River basin, a tributary of the Huallaga River, which is considered particularly important for understanding interactions between the Andes and Amazon regions. As a result, we were able to clarify some aspects of Andean-Amazonian interactions during the first millennium BCE.

研究分野：考古学

キーワード：アンデス考古学 アマゾン考古学 文明形成期 地域間交流

1. 研究開始当初の背景

アンデス文明形成期では、土器製作、冶金技術などの諸工芸や動植物利用の拡がりなど様々な技術が発達するが、これらの初期の重要な技術発達には、アンデス地域とアマゾン地域の交流が深く関係していたことが明らかにされつつある。しかし両地域の交流の鍵となる、アンデス山脈東側および隣接する上部アマゾン地域では、1970年代以降、調査が停滞しており、研究の基礎となる編年研究も進んでいない状況にあった。

2. 研究の目的

そこで本研究は、アンデス・アマゾン間の地域間交流が、文明形成期の技術発達にどのように作用したかを明らかにするため、南米ペルーのワヤガ・ウカヤリ川流域を対象として調査を実施する。申請者はこれまで、山地と熱帯低地の境界付近に位置するワヤガ川上流域で高精度編年を確立し、土器出現期から約千年間の山地での熱帯文化の受容の様子を明らかにした。本研究では調査地をさらに東側の低標高地域まで広げて踏査・発掘を実施し、研究の基盤となる編年を構築するとともに、ワヤガ川上流域との詳細な比較を行う。それにより、形成期におけるアンデス山脈東側-アマゾン低地の地域間交流の具体的な様相および土器製作技術の発達プロセスを考察する。

3. 研究の方法

本研究ではウカヤリ川中流域における形成期の高精度編年を確立し、ワヤガ・ウカヤリ川流域の土器製作技術の相互関係を明らかにするために、1年目に踏査を、2年目に発掘調査を実施した。まず先行研究を踏まえて踏査を実施し、ハンディGPSとドローンを用いて遺跡の位置の記録や簡易測量を行い、遺物を表面採集する。この成果をもとに調査地点を選定し、2年目に発掘調査を行う。地形や遺構はトータルステーションおよびドローンを用いて測量・記録を行い、慎重に分層しながら発掘を進める。遺物は適宜出土位置を記録しながら注意深く採取する。また詳細な年代解析を行うため、年代測定に用いる炭化物試料は分層後の層位断面からも網羅的に採取する。調査で得られた表採・出土遺物は適切に整理・記録する。土器資料は実測・拓本・デジタルトレースを行ったのち、申請者が行った先行研究と同様の分析手法を応用し、器形を主体に、文様と装飾技法を組み合わせた型式分類を実施する。他の資料も同様に記録し、詳細な観察をこなう。

4. 研究成果

2021年度の踏査では、新型コロナウイルスの影響により、申請者自らが現地に渡航することができなかった。そこで、現地の研究協力者と連携し、リモートで踏査を実施した。先行する考古学調査は、標高2000mほどの山間盆地であるワヌコ盆地(ワヤガ川上流域)の河川沿いを中心に行われており、二十以上の文明形成期の遺跡が見つかった。本研究では、ワヌコ盆地の西部から北西部に位置する海拔3000mを超す高標高地でも、盆地内とよく似た土器文化を持つ遺跡が複数分布していることが確認された。このことは、当地域の形成期の遺跡が、これまで論じられてきたように盆地を中心とするユンガ地帯に必ずしも限定されるのではないことを示唆するものである。特に、形成期前期(ワイラヒルカ期)の分布範囲は広範囲に広がっていた。

また、ワヌコ盆地から北東に下った熱帯雲霧林地帯に位置するモンソン川流域では、河川の合流地点付近に位置する丘陵上に建設された大型基壇建築が確認された(金崎 2023)(図1)。当遺跡は地元住民にチャウピヤク遺跡と呼ばれており、本研究でもこの遺跡名を踏襲した。チャウピヤク遺跡の基壇の残存する高さは約20mであり、基壇の最上段と二段目の基壇の間には半地下式広場と見られる遺構が存在した。遺跡の半分は森林に埋もれており、遺跡の全容は不明であるが、基壇の全長は百メートルに及ぶと見られる。また、丘陵の裾に広がる森林の中にも、丘陵頂上に登るための山道の一部と思しき石壁が確認された。

形成期の基壇建築は、ペルー極北部を除けば、主として太平洋岸~アンデス山中に分布しており、チャウピヤク遺跡の位置するペルー中央部の熱帯雲霧林地帯



図1 チャウピヤク遺跡

では、これまで形成期の基壇建築は発見されていない。したがってこの遺跡の存在は、アンデス・アマゾン間の初期の相互交流を理解する上で特に重要である。そこで2022年度は、チャウピヤク遺跡の発掘調査を実施することとした。

チャウピヤク遺跡は、モンソン川支流のチャウピヤク川およびリモンコチャ川の合流点を見下ろす山の尾根に造られた遺跡である。発掘調査から、当遺跡は少なくとも三段の段を持つ基壇建築であり、基壇の上には円形および方形半地下式広場や、部屋状構造物が建設されていたことが明らかになった。また、当遺跡には大きく分けて2つの時期があった。最初の時期に円形・方形広場や部屋状構造物が建設された。次の時期になると、円形広場が埋められたほか、部屋状構造物が低い基壇へと作り替えられた。

これらの2つの時期では、共伴する土器の特徴も異なっていた。最初の時期には、形成期中期・後期に中央アンデスに広くみられる形状の無文の無頸壺と、東斜面～熱帯低地に典型的な階段文様などを持つ鉢類が出土した。次の時期になると、近隣の標高2000～4000mの山間地域に分布するサハラパタクスタイルと呼ばれる土器が出現するが、これは標高500m以下の熱帯低地と共通するスタイルの土器と共伴していた。

またチャウピヤク遺跡では、フェーズ1の層位から、黒曜石の破片や無煙炭製鏡の一部が出土した。これらは形成期中期・後期の中央アンデス各地で、遠距離交易品として出土するものであり、当遺跡においても遠方から運び込まれたと考えられる。そのほか、人や鳥をかたどったと思われる小石像が出土している。

2022年度は、チャウピヤク遺跡の発掘調査と並行して、モンソン川流域の遺跡分布調査も行った。その結果、チャウピヤク遺跡の周辺には、少なくとも3つ、当遺跡と同様に段状の基壇を持つ大型石造建築が建設されていることが明らかになった。これらの遺跡とチャウピヤク遺跡はいずれも二つの川の合流地点を見下ろす尾根沿いに建設されており、互いに視認可能である。また、チャウピヤク遺跡からやや離れた地点でも、同様の立地に基壇建築が建設されていることが確認された。さらに、チャウピヤク遺跡付近を含む複数の地点に岩絵が分布することも確認した。

モンソン川流域は、アンデス形成期において最も重要な神殿遺跡の一つであるチャビン・デ・ワンタル遺跡や、先土器期から継続して多くの神殿が密集するワヌコ盆地と、アンデスの東側に広がるアマゾン低地とを結ぶルートの一つと想定される地域である (Nesbitt et al. 2021)。また、当地域はアンデスの儀礼において古代から重要であったココアの産地として有名であり、歴史時代にはチャビン・デ・ワンタル遺跡のあるアンカシュ地域までココアを運ぶルートが実際に機能していた。このような地域において、中央アンデス地域とアマゾン低地の両方の文化的特徴を備えた遺跡が存在したことは、当地域が実際に、アンデスとアマゾンの文化を結ぶ結節点としての役割を果たしていた可能性を強く示唆している。

本研究では、この交流がどのようなものであったのか、その全容を明らかにするには至っていないが、今後の研究に貢献する幾つかの重要な知見が得られている。チャウピヤク遺跡の建築は、円形・方形広場など、明らかに中央アンデス地域の伝統内にあり、特に当時突出した影響力を持っていたチャビン・デ・ワンタル遺跡の影響を受けたものと考えられる。一方で、当遺跡の土器は在地の伝統と考えられる熱帯的なスタイルの鉢が使用されて続けており、ワヌコ盆地等のようにチャビン・デ・ワンタル式の土器が卓越するという状況には至っていない。このことは、チャビン・デ・ワンタル神殿と、その周囲を取り巻く在地社会との間で、一元的でない、多様な交流のあり方が存在していたことを示唆している。また、形成期末期にあたるフェーズ2の土器の様子からは、高地から熱帯まで、広範囲にわたる相互交流圏が形成されていたことが示されている。

本研究のこのような成果は、アンデスとアマゾンの社会の間で、エキゾチックな物品の交換のみならず、双方向的な技術やアイディアの交換が継続的に存在していたことを裏付けるものである。このような相互交流が、形成期の物質文化の発達を促す重要な契機となっていた。本研究は、そのようなプロセスにおいて、モンソン川流域が重要な役割を果たしたことを初めて明らかにしたものであり、アンデス・アマゾン間の地域間交流の実態の解明に大きく貢献する結果となった。

引用文献

金崎由布子. (2023). 文明形成期のアンデス・アマゾン間相互交流. 『考古学ジャーナル』 779: 31-33.

Nesbitt, J., R. Johnson, and B. Asencios Ibarra. (2021). Connections between the Chavin Heartland and the Ceja de Selva in the Late Initial Period: New Perspectives from Canchas Uckro (1100-800 BC). Pp. 106–28 in *The Archaeology of the Upper Amazon: Complexity and Interaction in the Andean Tropical Forest*, edited by R. Clasby and J. Nesbitt. Gainesville: University Press of Florida.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kanezaki Yuko, Omori Takayuki	4. 巻 0
2. 論文標題 The Temporality of Shapes: A Genealogy of Early Pottery-Making Practices in the Andean?Amazonian Borderland	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Method and Theory	6. 最初と最後の頁 1,25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10816-022-09587-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金崎由布子	4. 巻 25
2. 論文標題 ペルー北部中央山地ワヌコ盆地、紀元前二千年紀の遺跡分布の再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代アメリカ	6. 最初と最後の頁 27,39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金崎由布子	4. 巻 779
2. 論文標題 文明形成期のアンデス・アマゾン間相互交流	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 31,33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuko Kanezaki, Carlos Viviano, Hironori Otani, Yune Sato, Jose Onofre
2. 発表標題 New Evidence of Andean-Amazonian Interaction in the Early Horizon: Excavations at the Chaupiyacu Site, Monzon District, Peru
3. 学会等名 SAA 88th Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金崎由布子, カルロス・ピピアノ, 大谷博則, 佐藤優音, ホセ・オノフレ
2. 発表標題 ペルー、モンソン川流域第一次調査速報
3. 学会等名 古代アメリカ学会研究大会第27回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金崎由布子、大谷博則、ダニーロ・デパス
2. 発表標題 ワヌコ盆地におけるレクワイ文化初期の痕跡：ピチャイコト遺跡の調査成果から
3. 学会等名 古代アメリカ学会研究大会第26回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金崎由布子
2. 発表標題 土器・貝ズ・時間性：紀元前二千年紀のワヌコ盆地の編年をめぐる一考察
3. 学会等名 古代アメリカ学会東日本研究懇談会第13回
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ペルー	DDC Huanuco			